

ベルマーク便り コンクール



2019年度ベルマーク便りコンクールは過去5年で最多の115校からの応募があり、優秀賞10校、佳作・特別賞各6校が選ばれました。入賞校のうち8校を訪問し、日ごろの活動ぶりや、子どもたちに向けての思いなどを伺いました。

入賞校を訪ねて

優秀賞 葉山町立葉山小学校

神奈川県葉山町にある町立葉山小学校(富樫俊夫校長・児童684人)が初めての応募で優秀賞を受賞しました。ベルマーク便り「ベルまま通信」を作成しているのは、PTA厚生委員長の佐藤香さんです。



副委員長の柳下あゆみさん、西尾智子さんと一緒に力を合わせて活動しています。

「ベルまま通信」は、すべて手書き。「読む立場になったときに、目につく手紙って何だろう」と考えたからといいます。太字と細字を使い分け、ベルマークファミリーのイラストを上手く活用し、情報を的確に伝えているのが特徴です。「お便りを書いた経験なんて全くなかった」という佐藤さんですが、書いているうちに楽しくなり、「自分の才能がどんどん発揮された」と笑います。

ベルマークは年4回、仕分け・集計作業します。厚生委員会は正副委員長しか

いないため、ボランティアが頼り。多いときは20人ほど集まるそうです。回収袋は児童に自作してもらいます。

そのほか活動は多岐にわたります。ダンボールで自作した回収箱を校内に置き、立体的なポスターをあちこちに貼り、土曜参観日に「ベルマーク商品展示コーナー」を設け、子どもたちへの周知を目的に「ベルマーク川柳」を募集し……。学校も、3年生が購入するリコーダーのマークを回収するなど協力的です。

富樫校長は「皆さん常に『学校にとって何が必要ですか』と支援の手を差し伸べてくれるので、本当に有り難いです」と感謝します。

保護者のベルマーク活動が盛り上がっているのを見た先生から「ぜひ児童にも手伝わせてもらえませんか」との提案もあったそうで、同校のベルマーク活動は今後も発展していきそうです。



優秀賞 聖ミカエル幼稚園

北海道札幌市にある聖ミカエル幼稚園(園児87人)のお便り「Bellmark News」を作成しているのは、「ミカエル幼稚園父母の会」会長の木村奈津恵さん。役員のメンバーは、副会長の横山留奈さんと木村晴子さん、会計の遠藤梢さん、会計監



査の中川亜美さんと打矢優紀さん、記録の森優子さんです。

年2回、回収袋を集めた後、役員以外の保護者も集まって作業をします。その名は「ベルマーク茶話会」。お便りには茶話会の様子も掲載し、皆さんに感謝の気持ちを伝えました。

お便りを通して、『「ベルマーク活動って楽しい』』ということをお便りの皆さまに知ってもらいたい」と考えており、それがより伝わるように写真を多く載せている点がアピールポイントです。

6月には、さらに活動を盛り上げるため、ベルマークをテーマにしたペー

サートを子どもたちに披露しました。伝えたかったのは、ベルマークが困っているおともだちを助けることのできる「魔法のマーク」であること。それを証明するかのように、同園は11月、台風・大雨被害被災校のための友愛援助に寄付し、「魔法のマーク」であることを実証してくれました。ペーパサートは保護者に対しても「ベルマークは必ず我が子に還元される」ことを伝える狙いがあります。

そのような活動ぶりを見て、渡部良子園長は「何年もかけてやっと集めていたような点数を、あっという間に集めてくださった」と驚いたそうです。

「みんなが楽しい『ミカエルライフ』を送れるようにしたい」という気持ちを原動力に、フルタイムで働きつつ、パワフルに活動してきた木村さん。「役員の協力、優しい先生方に恵まれて活動できています」と、感謝の気持ちを大切にしています。木村さんとお話をしていると、その優しいお人柄が伝わってきました。



佳作 札幌市立山の手南小学校

札幌市立山の手南小学校(山本豊校長・児童448人)では、保護者によるボランティア「ベルっきー's」が活動し、お便りの「Let'sベルっきー's」を発行しています。代表は前鼻久美子さん、お便りを作成しているのは書記の桑島純枝さんです。学校側の担当は品田亜希江先生で、ボランティアの皆さんとの間をつなぐ役割を担っています。

桑島さんは「感謝の気持ちを載せることや、文字ばかり書いてスルーされないようにすること、すっきりしたレイアウトを意識すること」を心がけています。

4月19日に配布された、今年度第1号に書かれていたのは「存続の危機」という文字。目立つように太字で、さらに下線が引いてありました。

山の手南小は2017年度、北海道の参加校1291校のうち集票点数33位という実績をあげましたが、翌年度は「集計しきれずたくさんのベルマークが残ってし



まった」そうで、その切実な思いが綴られていました。あえて危機感を全面に出した異例のお便りでしたが、その後「私でよかったら」と声をかけてくれる保護者が出てきました。

結果的に、ボランティアのメンバーは26人に増えました。今年はカートリッジ類の集計や整理袋の記入まで手が回るようになったそうです。毎回強制ではなく、参加できるタイミングで作業をしてもらっています。

ボランティアは毎年新しく登録するため、前鼻さんは「来年もたくさんの方に参加していただけたら嬉しい」と願っています。また、桑島さんは「学校のことを知ることができるし、子どもたちの様子も見られる。お母さんたちとしゃべりながら交流したり、先生とも顔を合わせられたり……。ボランティアっていいなと思います。もっとみんなやったらいいのにな」と魅力を語ってくれました。



佳作 堺市立登美丘東幼稚園

ベルマーク運動への参加は1983年。しかし少子化などの影響で園児が減り、「点数を集めるのが大変になったからか、4年前に就任したときは、ベルマーク活動は全く行われていませんでした」と平井純子園長。

そんなベルマーク活動が復活したのは



2018年度。立ち上げたのはPTAベルマーク委員の楠木恭子さんです。近所の市立登美丘西小学校でベルマーク活動の経験があり、「どうやればいいか知っていた。ベルマークなら家でもできるし、子どもたちに還元できると思ったから」。

すると、いきなり5月にとても多くのマークが寄せられ、びっくりしたそうです。「昔のクセで集めていたというおじいちゃんやおばあちゃんが、園の活動再開を知って大量に出してくれました」。運動が止まっていた間もマークを貯めていたのです。復活初年度に集まったマー

クは、合計1万点を超えました。

お便りは「ベルマーク点数のお知らせ」と題して毎月発行。すべて手書きです。「パソコンで作ったお知らせは、よく読まない人も多い。手書きなら逆に目を引くと思って」と楠木さん。毎月の集計結果の数字を大きく載せ、マークの会社別ランキングや、号によっては多く持ってきてくれた園児の名前とお礼、ベルマーク運動の仕組みなどが書かれています。イラストや商品の写真も豊富です。一人一人の顔の見える、とても温かみのある紙面です。

園児たちのベルマークへの関心も高まってきているよう。ベルマーク委員の江藤由希子さんは「上の子が通う小学校でもベルマークを集めているので、どちらに持っていかで取り合いになっています」と言います。買い物に行ってもベルマーク商品を探して「これに付いている」と教えてくれるそうです。

